

技術者の養成は、要するに“人間性の育成”である

終戦の年(1945年)に京都市で生まれ、翌年、父の復職に伴い北海道へ移り住み、山に囲まれた炭鉱町の美しい自然環境の中で小学校を終えるまで過ごしました。中学入学を機に京都の祖父母に預けられ、学生生活を終えるまで12年間に渡って古都の文化を満喫したのです。この2つの相異なる気候風土と住環境を多感な少年時代に体験したことは、私の多様性享受の姿勢に大きく影響を与えたと感じています。

子供の頃から理科好きで、大学では当然のように工学部の機械工学科を選びました。大学院で物理工学を専攻したことは、その後の技術者としての生き方に大きく影響したと思います。特にニュートン力学に基づく認識の仕方に馴染んでいたところに突如、量子力学に触れた時の衝撃は大きく、それを契機にデカルトの方法序説を何度も読み返すようになりました。デカルトの数学的な自然認識の立場に魅せられ、日立製作所での設計作業にも大いに役立てることができたと思っています。この一連の過程については「技術者の生き方について」という拙文に纏めましたので、興味のある方はご覧ください(『デカルト読本』、pp.295-303、法政大学出版局、1998年)。

日立では当初、研究所勤務を薦められましたが、製造業の現場で仕事をしたいという思いからハードディスクドライブ(HDD)の設計製造を行っている小田原工場へ設計者として配属してもらい、技術開発や設計作業の他に原価計算についても勉強する機会を得ました。入社当時は、コンピュータと言えばメインフレーム、メインフレームと言えばIBMという時代であり、IBM社のディスクサブシステムを凌駕するような製品開発は夢のまた夢と言われていました。しかし、従来の記録媒体(ディスク)を磁気ディスク装置から取り外しする方式に代わってヘッドとディスクが一体となる方式が導入されると、他社製品との機械的互換性を保たねばならないという設計上の制約がなくな

りました。この好機を逃さず、我が開発部隊はロータリーアクチュエーターを採用した新しい概念に基づく設計を実現し、製造コストを半減し信頼性を10倍にするという目標を達成し、事業業績にも大きく貢献できました。

1999年に事業部長に就任し、翌2000年には日立のコンピュータ製品のセールスとサポートを全世界に展開している日立データシステム社(HDS)の社長&CEOに就任することになりました。これは入社以来初めての転勤であり、海外勤務となりました。赤字に苦しんでいたHDSでの最初の仕事は600名のレイオフという極めて厳しいものでしたが、1年余りで黒字化を達成しました。2003年、日立がIBMのHDD事業部を買取り合併会社(HGST)が設立され、私はその初代社長&CEOに任命され、日米両国の文化が入り乱れた巨大統合を遂行しました。この間、アップル社のスティーブ・ジョブズ氏との出会いなどが深く思い出に残っています。その後、この会社は成功裏に他社に売却されたことについてはご存知の方も多いと思います。

2006年に米国から帰任し技師長に就任。それまでの経験から企業で最も大切なことは人材の育成であることを確信し、後輩の指導に力を入れるようになりました。社内研修の講師に留まらず、米国加州州立大学の学長諮問会議のメンバーとしての活動、オクラホマ大学ビジネススクールでの講演、ボストンにある新興のオーリン工科大学学長との親交など、また日立退職後は岡山大学の客員教授などを引き受け、講義を受け持ちました。このような時に縁をいただき、2014年に大阪電気通信大学の理事長に就任いたしました。

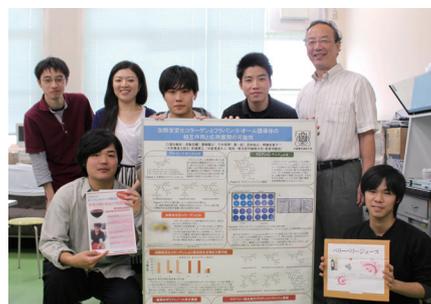
大阪電気通信大学は、1941年に通信技術者の育成を目的とした学校を前身とした高校と大学を持つ学校法人で、5学部を持ち、幅広い領域での教学活動を展開しています。初代学長の遺稿にある“技術者の養成は、要するに人間性の育成で

成瀬 淳

学校法人 大阪電気通信大学 理事長



なるせ じゅん：京都府出身。1970年京都大学工学研究科修士課程修了。同年(株)日立製作所入社。ストレージ・システム事業部事業部長、米国 日立データシステム社(HDS)社長&CEO、日立グローバルストレージテクノロジー社(HGST)社長&CEOなどを経て、2006年(株)日立製作所技師長。2014年より現職。



アクティブラーニングの場でもある「ベリリーベリプロジェクト」の学生と共に

ある”という言葉と伝統に支えられ、大学創立以来の45,000人を超す卒業生たちは中核的な技術者として各企業で活躍しています。

日本の企業は、戦後の復興を成し遂げる過程において経営の基本となるガバナンスの整備や企業人としてのdisciplineの強化に励んできたと思いますが、本学園では研究や教育活動に力を入れてきた一方、経営に関する基本的な部分の改革は未だ途上にあり、現在、教職員が一丸となってサイロメンタリティーからの脱却に力を入れているところです。私のこれまでの経験を高等教育の現場で生かし、少しでも学生ならびに教職員のために貢献できれば、このうえない喜びです。